

ペルシャの古楽器

日本計量史学会理事

新井宏

日本計量史学会の「計量史をさぐる会二〇一三」が11月29日、兵庫県明石市の大和製衡本社で行われ、夕刻には近くのライブハウス&レストラン「ポチ」で懇親会が開かれた。

そこで、大和製衡社長の川西勝三氏が余興を兼ねて紹介してくださったのが、ペルシャの古弦楽器「サントウール」である。

紀元前のアッシリアに原型が見られるとのことであるが、七十二の弦を持ち、通常の十二音律ではなく、四分の一音単位で二十四音に分けた二十四音律と聞いてびっくりした。計算してみると、四分の一音の周波数比差は三%で、その十分の一程度、すなわち三分の一まで、七十二もある弦を調律するのはかなり大変だということが良く判る。

実は、音にこだわるのには理由がある。古代の尺度を研究していると奇妙な表現に出会う。どうも、古代中国では「尺」の長さを「音」で規制しようとしていたらしいのである。もちろん、最初に「尺」があつて「律管の制」によつて、基準音

「黄鐘」の管長を九寸、孔径三分、囲九分などと定めたのであるが、『漢書』律歴志では、既に「度量衡皆律の黄鐘管より起る」と記していて、あたかも黄鐘音が尺を決めるような表現に変わるのである。

しかも中国では「音律が乱れると政治が乱れる」という思想があつたために、律は政治と不可分であり、音律の乱れは重大事であつた。

ご承知のように古代中国では、尺の長さが徐々に伸びる。そのため、黄鐘音から尺を求めると合わないかつたらしく、音から尺を修正しようとするのである。

理屈はその通りであるが、私の疑問は、「音」が「尺」よりも正確に伝世するものだろうかということである。

そのことについては、音楽に詳しい方に基づいて聞いたが、人間には絶対感音が備わっており、基準音を一度覚えると、一生わすれないというのである。いわば、目に見えて測れる「長さ」よりも目には見えない「音」の方が正確に伝わることもあるらしい。

いまだに疑問は解けないままであるが、メートル原器も廃され、いまやメートルの長さも光の速さで定義されている。あ

るいは、音で長さを規定した古代中国は意外に進んでいたのかも知れない。そんなことを思いながら、「サントウール」の演奏者にいろいろ質問し、更には、川西社長のサクスを聴きながら飲んだ懇親会の酒は抜群であつた。

(前韓国国立慶尚大学招聘教授、元日本金属工業常務、金属考古学、計量史)